

## 善永寺の歴史探究シリーズ1

はじめに

善永寺では2019年11月23日「善永寺本堂・太子堂建築落成慶讃法要 善永寺創建750年 本願寺派改宗400年 寺基移転90年 記念法要」を勤修しました。その記念として小冊子を発行し、善永寺の歴史も収録いたしました。善永寺の歴史はすでに昭和44年10月「宗祖700回大遠忌 本堂庫裏落成慶讃法要」の折に配布された「善永」に掲載されていました。

それから50年が経過し、新しい資料が発見されたり、出版されたりしてそれまでわからなかったことが判明してきました。そこで今回は新しく判明したことやその後の50年をまとめて掲載いたしました。その中で誌面や研究不足のため割愛したものも多くありました。そこでこれから善永寺史の中で焦点が当たってこなかった遺物や仏具、建築中に修復を行ったもの、そして新たにわかったものなどを発表していきたいと思っています。

### 第1回 善永寺天水桶研究

#### 1. 善永寺天水桶とは 形状

天水桶とは、屋根を伝って落ちてくる雨水を溜めておく桶または鉢です。材料は銅、鉄、石または木製の桶で、雨水を再利用して飲料や消火用の貯水タンクとして江戸時代から使われてきました。以前は天水鉢あるいは水溜とも言われたようです。

善永寺の天水桶は、鑄鉄製、口径 外径 1,060mm、高さ 890mm です。正面に菊花紋(十六八重表菊)が浮き出るようにできています。正面から見て右側に4名の寄進者名があります。製作者、製作年代は不明です。また普通一対で据えられているのですが、善永寺では片方しかありません。



<修復以前の天水桶>

この菊花紋は1869(明治2)年より天皇紋として使用が制限されたものでした。しかしそれ以前も天皇家と深く関わるもののみ使用していたと思われます。

今回の建築で、この天水桶を修復して再利用することとなりました。修復前は写真のようにさびが出て一部小さな穴が開いていたようでした。

#### 2. 形状からわかること

まず正面の菊花紋について考察します。善永寺では皇室との関係は江戸時代ではなく、寺院の格としてもふさわしいものではなかったと思います。しかし本願寺派江戸時代「門跡寺院」となり、築地本願寺は「築地門跡」ともいわれていたようです。

次に寄進者について。大きく横に『寄進』と書かれ下に四名の居所と氏名があります。

元四日市	丸屋仁兵衛
同 町	尼屋直吉
新右衛門町中通	神寄屋吉兵衛

## 富澤町 信濃屋又右衛門

以上4名の記名がありますが、善永寺の過去帳にはこの方々の名前はありませんでした。

元四日市は日本橋の南側の町名でした。新右衛門町は日本橋の近くで現在の高島屋周辺と思われます。富沢町は現在「日本橋富沢町」として現在ある町名です。

ということはこの天水桶は元々善永寺へ寄進されたものではなく、どこかから招来されたものと考えた方がよいと思われます。それは築地本願寺なのでしょうか。

### 3. 研究者よりの指摘

あるとき、川口鑄物の研究者で天水桶にも造詣の深い方より、「築地本願寺由来の天水桶と考えた方がよいだろう。またそうだったら、香取秀眞著『日本鑄工史稿』大正 3.8.12 甲寅叢書刊の年表に築地本願寺へは、文政と天保年間に納めた記録があるのでそれだろう。」と指摘されました。(ブログ「天水桶 96」) また築地と縁が深い「釜六が作ったものだろう」とも言われました。釜六とは釜屋六右衛門、当時有名な鑄物師で太田近江大掾藤原正次の通称です。多くの梵鐘や天水桶などが築地地中寺院や別院に残されています。

『日本鑄工史稿』によると、

- ①文政7年9月に鉄天水鉢
- ②天保7年9月に鉄洗盤
- ③天保12年3月に鉄天水鉢が納められています。

このうち②は現在本願寺和田堀廟所に設置されているものです。また以前本願寺慈光院にも木製樽形の鉄の天水桶があり、これも釜六製らしい。(『築地別院史』の写真には慈光院と書かれた天水桶がある。昭和12年以降に替わったものと思われる。)

### 4. 築地本願寺の歴史から

築地本願寺は正式には「本願寺築地別院」といい、通称「築地本願寺」と称していました。しかし現在では本願寺の規則が変わり正式に「築地本願寺」と言うようになりました。さて築地本願寺の歴史を知るには3冊の資料があります。昭和12年に出版された『築地別院史』(旧と呼びます。)昭和33年の『築地本願寺遷座三百年史』(同 三百)昭和60年の『新修 築地別院史』(同 新)です。

これらの書物から江戸時代末期と明治大正時代に築地本願寺が火事になり全焼したのは6回あったとおもわれます。

1. 文政12年3月21日
2. 天保5年2月10日 建築中の仮御堂も焼失。  
このとき天保7年8月9日 釜六が御堂前で梵鐘を鑄立てる。(旧 p.163)  
天保12年8月1日 落慶法要を営む。(新 P.205)
3. 安政3年8月25日 暴風雨のため本堂倒壊
4. 明治5年2月26日 諸堂宇、末寺焼失。梵鐘焼失。
5. 明治26年9月7日 本堂、対面所書院焼失。
6. 大正12年9月1日 関東大震災。

この記録と「日本鑄工史稿」の記録から、文政7年の火災以前に①が据えられ、天保5年の火災以後、②③が納入されている。また梵鐘も同じく天保7年に鑄造され、明治5年まで使用されていたことがわかります。また②が本願寺和田堀廟所に現存していることを考えると、天水鉢もまた現存してもおかしくないと思われます。

『旧築地別院史』には多くの写真や図版が掲載されています。その中で、「築地別院境内全図 明治 18 年 12 月」があります。この図で、中門外に一对の「鉄水溜」、そして玄関外にもう一对「鉄水溜」。そして本堂前には「銅水溜」が一对記載されています。また同書に「大正震災前の本堂外観」という写真があります。この中の天水桶は最近まで「慈光院」に設置されていた木製樽形の鉄の天水桶と酷似しています。多分それが明治 26 年の火災で焼失した後の本堂前にあった天水桶と思われます。

では善永寺の天水桶は文政か天保かどちらだったのでしょうか。

善永寺天水桶には四人の寄進者名があります。これが年代決定の決め手となるはずですが、江戸時代の商人を調べるには、いくつかのデータベースがあります。それを調べたのですが、一人もヒットしませんでした。それはこれらのデータベースが『江戸買物独案内』という文政 7 年に出版された本を基礎にしているからと思われます。ということは寄進者は文政 7 年には存在しなかったことを意味しています。そう考えてみると善永寺の天水桶は、天保 12 年に築地本願寺へ納入されたものが、明治 26 年の火災以後に善永寺へ移転したものであると思われます。

明治 26 年の火災後、27 年 3 月善永寺住職高輪圓隆、副住職板敷倫雄は共に「築地別院再建事務局理事」に任命され勸励募財などに尽力したようです。(善永寺蔵「善永寺記録 明治 14 年 1 月」)その関係で善永寺へ天水桶が来たのではないのでしょうか。

## 5. 平成30年の修復について



善永寺では 2019 年 11 月「善永寺本堂・太子堂建築落成慶讃法要 善永寺創建 750 年 本願寺派改宗 400 年 寺基移転 90 年 記念法要」を修行しました。その際、株式会社若林仏具製作所に依頼し、天水桶も大規模に修復を行いました。内容は次の通りです。

### <現在の天水桶>

洗浄 既存 錆落とし

内部 亀裂、割れ、巣穴箇所へ エポキシ樹脂充填 補強

内部 防水塗装仕上げ

外面 青銅色ウレタン塗装仕上げ

天水桶落とし ステンレス板金製 青銅色仕上げ 深さ 400mm

水漏れが止まらないので上からステンレスのお皿を乗せ、内部を保護する

以上の修復を行い、現在本堂前に設置しています。設置並びに移動については株式会社鈴木石材店のご協力をいただきました。ありがとうございました。